

湯島聖堂「神農祭」と少彦名神社 「神農さんのお祭り」の比較の検討*

湯浅高之 藤野 珥男 手塚 裕文
斎藤 憲一 西村 好一 小林 一日出
飯 渕 義久 植木 清二 荒井 照夫
百瀬 深志** 西巻 明彦 屋代 正幸***

要 旨

神農を医薬祖として奉祀している神社や祠は、日本各地に存在すると思われるが詳細は定かでない。また、これらの神社で神農を奉讃する神農祭を執行しているか否かも判然としない。しかしその中で、東京都文京区湯島聖堂の「神農祭」と大阪市東区道修町の少彦名神社の「神農さんのお祭り」は、古い伝統をひき継ぎながら現在でも綿綿として続けられている。この両地の神農祭は、医薬祖である神農を祭神としていることでは同一であるが、その祭りの様式と内容が異なっている。湯島聖堂の「神農祭」は、日本漢方の医学者が主体の「医学祭」的色彩が濃く、少彦名神社の「神農さんのお祭り」は、町の庶民が主体の「商業祭」の様相を呈する。

* Study of Comparison of Yushima Temple 「Shinnōsai」 to Sukunahikona Shrine 「Shinnōsan Matsuri」

** Takayuki YUASA, Yoshio FUJINO, Hirofumi TEZUKA, Kenichi SAITOU, Yoshikazu NISHIMURA, Kazuhide KOBAYASHI, Yoshihisa IIBUCHI, Seiji UEKI, Teruo ARAI, Fukashi MOMOSE, Ikezono dental research group 池園歯科研究会

*** Akihiko NISHIMAKI and Masayuki YASHIRO, The Nippon Dental University 日本歯科大学

本論文の要旨は第19回日本歯科医史学会学術大会(1991年9月7日大阪歯科大学講堂)にて口演した。

神農という同一神を祭神としながら、祭りの発展過程で、祭りを司る人々と地域性の相違から、内容が変化し、東京と大阪では異なる形として現われていったものと思われる。

(キーワード Key words)

神農, 湯島聖堂, 神農さん少彦名神社

I 緒 言

大阪市東区道修町の少彦名神社は、古来より「神農さん」と親しみをこめて呼ばれている。この少彦名神社においても、例年11月22日、23日に「神農さんのお祭り」が執り行われていることを知り得た。

著者らは、この少彦名神社ならびに「神農さんのお祭り」を紹介し、神農と神農の祭りについて、それがどのように庶民の精神生活の中へ親しく溶け込んでいったかを、その祭礼民俗の中に考えてみようと、東京湯島聖堂の「神農祭」との比較検討を試みた。

なお、東京湯島聖堂の「神農像ならびに神農祭」についての紹介は、著者らによって本学会々誌第17巻第3号(1991年5月)に投稿・掲載されているため、ここでは省略する。

II 少彦名神社の概略:「神農さん」は愛称

大阪府中央区と東区にまたがるビジネス街に道

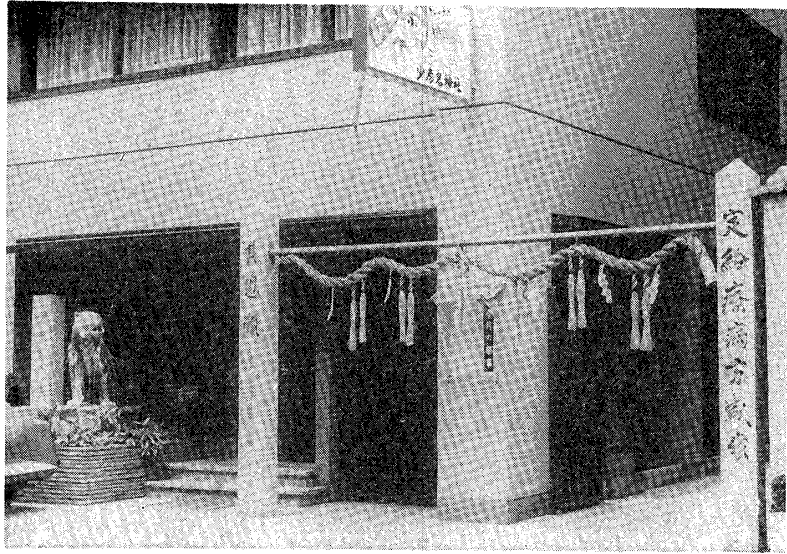


図1 左端に少彦名神社標柱と虎のブロンズ像が建っている



図2 少彦名神社の社殿と境内

修町と呼ばれる所がある。全国に名前の通った製薬会社の多くが誕生した古い町である。今もおびただしい数の製薬会社や薬問屋が軒を連ねている。その町の一角のビルとビルの中に、虎のブロンズ像と白い石製の神社標柱が建っている(図1)。一般の神社の社殿の前には、一对の狛犬が守護として置かれることが多いが、ここではそれが見あたらない。その理由は後述するが、当社と虎とは極めて関係深いものがある。この標柱をくぐり細い路地を伝うと石製の鳥居が建っていて、笹木の下扁額に少彦名神社とある。鳥居をくぐると幾分広くなった境内があり、唐破風の軒をも

つ社殿が建っている(図2)。

この神社は通称「神農さん」の名前で知られ、毎年11月22日、23日のお祭りは、地元だけではなく、大阪一円からの参詣者で賑わう。この祭りには、「張子の虎」をつるした笹竹が病除として販売され、参詣者からは、これを買って求めて自宅に飾ると無病息災が叶うと信じられており、古くから信仰が厚い。大阪では「張子の虎」をつるした笹竹を見れば、誰もが「神農さん」を連想する。しかしながら、その神社に少彦名神社という名前のあることを知る者の方が、意外に少ないようである。

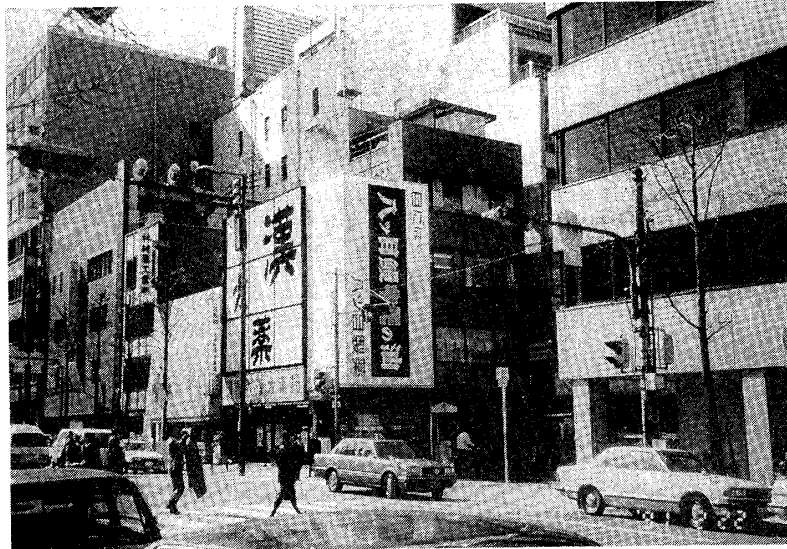


図3 道修町は製薬会社・薬問屋が軒を並べている

III 少彦名神社が現在地に 鎮座するまでの変遷

1) 祭神は少彦名命と神農

日本古来の薬祖神は少彦名命であるといわれている。古事記によると「神皇彦霊神（カムムスビノカミ・万物生成の神）の手の股より漏れ出で…云々」と、その誕生の様子が記されている。このように少彦名命は、小人の神ではあるが大国主命と共に国家造営に力を注ぎ、人間はもとより家畜の類に至るまで愛護を尽くされ、病を治療する方法を定め、庶民の生活と共に歩まれたと伝えられる。

一方、神農は、中国三皇五帝の一人で、農耕を教え、市を開き、薬草を求め身をもって試し医術の道を示したといわれる。神農は、「百草をなめて一薬を知る」の有名な言葉と共に、広く東洋全域に知られている。しかし、神社名をあえて少彦名神社と称しているのは、「浪華百事談」¹⁾によるまでもなく、明治政府の宗教政策に基づくものである。このことは、明治政府が、明治元年（1868年）3月13日に王政復古の大号令を発したが、これを端緒として、原始社会を支配していた祭政一致の制度をも回復しようとする太政官布告が発令され、同年3月17日、28日に、神仏分離令、廃仏毀釈政策²⁾が実行され、異国名をもつ神農は蕃神

とみなされたため、皇祖天照大神に隷属している少彦名命の少彦名を社名に名告らせた。この事実が、神社の名称をあえて少彦名神社とした一つの理由であると思われる。

2) 薬の町、道修町

薬種取引市場としての道修町は、豊臣秀吉が築いた大阪城の城下町として、町家が立ち並びだした頃といわれる。しかし、今日の繁栄を道修町にもたらしたのは、神社の縁起によると、「享保7年(1772年)、時の将軍徳川吉宗公が南紀より入国の途次、大阪に病んで治せず、乃ち道修町より薬を進じたるに、其効験忽ち現はれて本復せられる。聡明なる公は、大阪道修町に薬種問屋124軒を免許せられ、和薬改会所を設けて諸国産地より入荷する薬の真偽、善悪を吟味する特権を附与せられた。」とあり、これ以後道修町は、薬種取引の中心的地歩を築いた。以来代々薬業を受け継いできた道修町は、日本の薬種取引の中心地となり現在に至っている（図3）。

3) 鎮座200年余・社の変遷

当時の薬は、人命にかかわるほどのもので今以上に価値観の高いものだった。その薬は、中国渡来の漢方薬だったことから、その吟味は大変難しいものであった。そのため、神の加護を受けてその職務を厳正に遂行しようと、天照大神の加護を得るために「伊勢講」という講を組織し、伊勢神

宮にまで参拝していた。

しかし、安永9年(1780年)10月に京都五条天神の祭神のうち少彦名命を道修町の寄合所に勧請し、同時に中国の医薬祖、神農も合わせて鎮祭した。では、なぜ五条天神から少彦名命を勧請してきたのかは、神社側からの談話からも理由が判然としなかった。

五条天神³⁾の祭神は、大己貴命、少彦名命、天照大神で天使社とも称する。社伝では、平安遷都にあたり、空海が大和国宇陀部郡から天神社を勧請したのが始まりと伝えている。また五条天神には、医家の神農像を祀る始めをなしたとされる田代宗敬(元禄宝永年間：1688～1710年)が神農炎帝を尊崇して、その像を祠内に安置したといわれている。古来、農耕・病氣退散・医薬・厄除・^{きんえん}禁厭(悪事や災難を防ぐこと)の神として朝野より崇敬された。特に、天皇御悩の時は、社前に^{ゆぎ}韃(矢を入れて負う武具)をかけて平癒を祈願したと伝えられる。また、神社標柱に皇国医祖の文字が見られることから、特に朝廷の崇敬が厚かったことは事実であろう。このような事情から類推するに、医薬祖としての神格、神徳とも广大で、薬種業者の祭神には頼むに足る神と考えて迎えられるものと思われる。かくして、神社ができてからは、「伊勢講」は「薬祖講」となり、薬種業者らは薬の吟味に万全を期し、なおかつ業者間の精神的結束もより強いものにしていったようである。

安永9年(1780年)の鎮座当初は、薬種仲間会所の神棚に奉祀していたものが、大塩平八郎の乱で類焼し、天保11年(1840年)から会所の庭内に小さな社を建てて鎮祭していた。

明治39年(1906年)には、社寺に関する取り締まりの変更から無格社であったが、他社に併合するか充実して独立存置をはかるかの岐路に立たされた。

明治42年(1909年)5月、大阪薬種卸仲買組合は、神社独立経営の方針を定め、境内地を拡張し、同43年(1910年)4月から新本殿、拝殿、社務所等が造営され、10月19日に正遷宮が行われた。以後社殿も老朽化し、昭和55年(1980年)、

鎮座200年記念事業として神社改築が行われて現在に至っている。

こういう歴史背景から、神社名が少彦名神社でありながら、医薬祖として呼称するのには、少彦名命よりも「神農さん」と称した方が耳なじみが良い。このことも、神農の名を捨てずあえて通称名の「神農さん」と称されている理由と思われる。

IV 「神農講」の発生とその内容

大阪の薬種商の集住地、道修町の記録の中に「神農講」の名が最初に見られるのは、享保12年(1727年)⁴⁾と思われる。「神農講」は道修町の薬種仲間の外郭団体の集団名であった。元来、薬種仲間は、享保7年(1722年)8月に幕府公認株数124店から発足している。

薬種商に要求されるものは、生薬の良否や品種の鑑別の知識であり、さらには、診断・調剤についての知識も要求された。薬種業者の徒弟は、ある期間店主についてそれらの知識を習い覚え、修業のすんだ後本店(ほんたな)からの分家やあるいは暖簾分けによって分店あるいは脇店(わきだな)を出してもらっていた。こうした際に、薬種の仲買を営もうとするのに、仲間株の譲渡や権利の借用が生じてくるが、その営業を保証する手だてとして、第二組合的な集団を作り、同業者仲間の集団を「神農講」とよび、神農の名のもとに、営利的にも精神的にも結束を固くした。

V 市場交易の初祖神農は、 香具師の守り神

神農の発生は中国で、しかも伝説上の人物であることはいままでもないが、架空の人物にもかかわらずわが国の香具師は、現在でも神農を祖と仰いでその子孫と称し、また守り神として奉じている。このことに関しては、東京歯科大学名誉教授の長谷川正康氏及び大阪市開業・本学会名誉会員の杉本茂春氏(第18回日本歯科医史学会学術大会発言)からも示唆を得た。

香具師は、軒先から外の仕事の、稼業人とも呼ばれている⁵⁾。路上商人であり、薬を商いながら

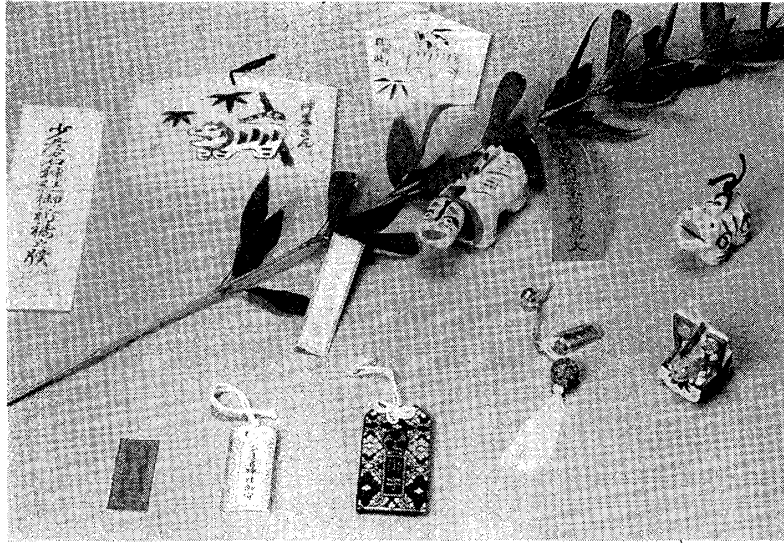


図4 少彦名神社によって販売されているお守り類
(神社によって販売されている絵はがきより転載)

街頭医をも兼ねた香具師は、後に様々な品物を販売するようになり、明治に入ってから^{てきや}は的屋と呼ばれるようになる。その社会は、商品経済の担い手として最も原始的な稼業の形態を現在に維持している。その仲間が店を構える場所は、祭礼や盛り場など人々の集まる戸外であり、また移動業種であることから、一家という緊密性を保つ上で、厳しい戒律と掟が要請されている。これら戒律と掟の盟約は、古代中国の市場の祖である、神農の名のもとに行われるのが常である。

香具師は、その精神的な結束を固めるのに、香具師を名告る者は皆神農の子孫であるという、神農の偉大なカリスマ性を最大限に利用してきた結果、今日も絶えることなくその系譜を保つことができたものと思う。

VI 神農さんのお祭りと 「張子の虎」の由来

神農さんのお祭りに欠かせないのが笹竹につけた「張子の虎」である。これは、例年11月22日、23日の神農さんの例大祭の日に限って授与されるもので、無病息災・病除のお守りとして有名で、遠方から求めに来る人も大勢いる(図4)。

江戸時代、大阪は有数の港湾都市で、天下の台所の名を欲しいままにする程栄え、この港を介し

て海外との交易も少なからずあったようだ。これが不幸にして、文政5年(1822年)と安政5年(1858年)の2回にわたり、三日コロリと呼ばれたコレラが大流行した一因をなした。道修町の薬種仲間は、虎頭骨などを配合した「虎頭殺鬼雄黄円」という丸薬を施与したが、多くの犠牲者が出た。特に庶民は財力がなく、医者はおろか薬も満足に入手できなかったようである。そんな折に、香具師の妻たちが手内職で「張子の虎」を作り、少彦名神社の神前に供え、笹竹につけて病除の祈願をして無料で与えたところ、当時の庶民の爆発的な人気を得ておおいに評判をとり、それが現在でも病除のお守りとして連綿と受け継がれている。

ところで、この2回にわたる殺戮的コレラの大流行に対して、医療界は手をこまねいていたわけではない。第1回目の文政5年の流行時には、伝染病の認識がなく手の施しようもなかったのである。しかし安政5年の流行時には、この苦い経験を基に予防策を講じている。このことは、文献^{6,7)}によれば、適塾の塾頭緒方洪庵が、安政5年に「虎狼痢治準」を著わしたとある。その内容は、西洋医学をふまえた洋医方を唱え、それに則った伝染病に対する予防が記されており、わが国における公衆衛生学の先駆といわれる。また洪庵は、



図 5 湯島聖堂の神農像



図 6 少彦名神社の神農図

この本を著述しただけでなく、実際にコレラの子防を啓蒙しかつ治療にも専念している。これらの行為は、医学的に意義深いものである。

このように幕末期の大阪では、庶民の心の中に息づく民間信仰が爆発的に流行するかと思えば、西洋医学の知識も合わせて流入し、両者が併立して庶民の中に滲透していった時代でもあった。

VII 少彦名神社と湯島聖堂の祭神及び祭りの比較

少彦名神社の祭神は、前述したように少彦名命と神農とを合祀している。しかし、祭神はご神体のため公開されていない。その代わりに、社務所でお神絵として絵姿を販売しているが、明らかに神農図である。この絵と湯島聖堂の神農像を比較すると、絵図と木像との違いはあるが、容貌は角を有し、着衣は木の葉をまとい、手には葉草を握るという極めてよく似た様相である（図5,6）。

また、両所の祭りの様子を比較してみると、例年11月23日に挙行されるという点では同一であるが、祭りの行われ方や雰囲気には大きな隔たりがある。少彦名神社のお祭りは、祭りの呼び方からして異なっている。「神農さんのお祭り」と親しみをこめて呼ばれている。お祭り当日は、神社前

の通りに露店商がたくさん出店し、お祭りらしい賑わいをみせ、社務所では笹竹につけた「張子の虎」がたくさん売られ、不特定多数の人々が参拝するという、町をあげての祭りの様相が色濃い（図7,8）。

この祭りの最初は、道修町の薬種業者が主体で行われていた。彼らは、同業者の組合互助組織である「薬祖講」あるいは「神農講」という講を形成し、彼らの精神的よりどころである神農のもとに、結束を誓い合い感謝を捧げるといった祭りであった。これが後に、道修町や近隣の町衆が祭りに加わるようになり次第に大きく発展した。

また、この他の要素として、彼らとは別に、香具師と呼ばれる露店商の人々は、自分たちは神農の子孫であるという根強い思想をもち、神農を、市を開き交易を盛んにした神として、カリスマ的に崇敬した。彼らも「神農講」あるいは「神農会」という講を為し、仲間の精神的結束をはかり、この祭りに融合的に参加していった。かくして今日では、無病息災・身体安全を願う「医薬祖」としての性格の他に、「市の祖」としても敬われ、町をあげての『庶民』が主体の「神農さんのお祭り」が行われている。

一方、湯島聖堂の祭りは、「神農祭」といいな



図7 少彦名神社の祭り当日の道修町の賑わい
(神社によって販売されている絵はがきより転載)



図8 少彦名神社の祭り当日の神社境内の賑わい
(神社によって販売されている絵はがきより転載)

らわされ、その式次第(図9)からもわかる通り、財団法人斯文会が主体となって漢方医学関係者、地元の薬剤師会、および湯島聖堂関係者というごく限定された人々による、神農を中心に据えた『官』の立場からの祭りであり、神式による式典(図10)という形で継承されてきている。将軍徳川家斉の時代に、将軍に許しを得て、神農像を移遷した躰壽館において、春秋の祭儀を修め、これより神農祭は官祭となったという経緯からもうな

づける。このため、一般の人々も参加して、町ぐるみの祭りという形ではない(図11)。

このように、東京、大阪とも神農という同一神を祭神としながら、祭りの様式に大きな相違がみられる。

VIII 日本のお所に祀られる神農

日本の各地には、その数は不明であるが、神農を祀る神社や祠が存在しているようである。そし

第三十八回 神農祭 次第

期日 壬戌年十月二十一日(祝日)
 時間 午後二時
 場所 湯島聖堂(神農祭)
 主催 財団法人 湯島聖堂
 協賛 湯島農談会 丸岡林

可式 (新) 文会 加藤 道徳(整理)

御会者着席	可式	(新) 文会	加藤 道徳(整理)
祭主・神官着席			
開式			
祈禱		神宮	(起立)
移座		神宮	(起立)
祝詞		神宮	(起立)
祭文本読		新文会	恒孝会長(起立)
玉串拝礼		新文会	徳川会長
		本郷兼利師会	術宮会長
		神田兼利師会	永山会長
		方術信和会	都築会長
		日本薬方協会	山内会長
		北里薬理研究所	小曾会長
		温知会	大貫博行会長
		医道の日本社	戸部主幹
		日本薬理学会	室賀会長
		水産薬学協会	矢敷会長
		湯島聖堂伝道所	木村院長
		神宮	
御座席			
神宮退席			
祭主・参会者退席			

図 9 湯島聖堂の神農祭の式次第

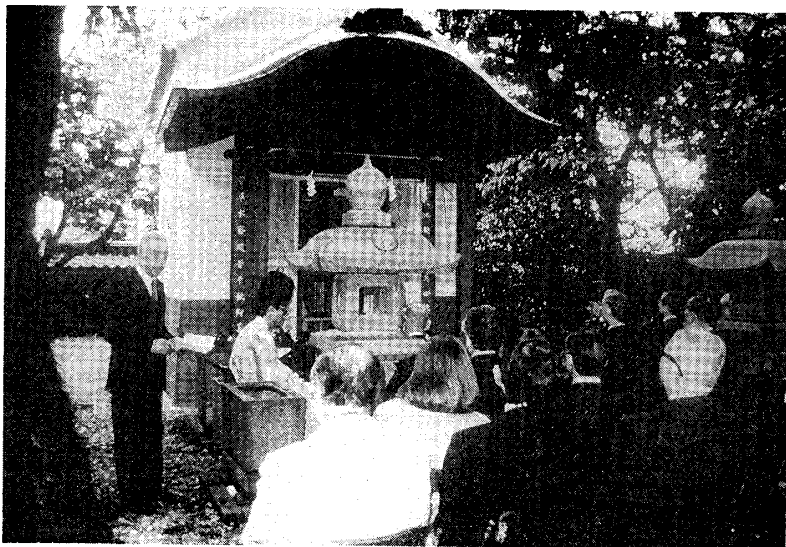


図 10 湯島聖堂の神農祭の神式による式典



図 11 式典終了後、参列者が玉串拝礼している様子

て、薬種業者の集住地が大坂道修町にあった関係で、関西方面に多いものと思われる。また薬種業者の中には、個人で神農を祀りお祭りをしている人もあるといわれる。こうした中で、歴史的に

実体が判然としている三例を掲出した。

1) 京都二条薬祖神祠

京都市中京区二条通りにある小祠⁸⁾。祭神は、中国の薬祖神神農、日本古来の神である少彦名

命、大己貴命、西洋医学の祖ヒポクラテスを合祀する。かつて二条通りの高倉・新町通りの間に同業者町を形成した薬問屋が、安政2年(1855年)に創建した。毎年11月に薬神祭を行い、薬種を用いた人形を奉納していた。

ここで注目すべきは、中国、日本、西洋の医祖を融合的に祀っていることである。京都の人々は、信仰の対象となるものは何でも崇めてしまうという宗教に対する柔軟な考え方を持っているようだが、あえて悪くいえば、そのいい加減さに驚きを感じる。

2) 奈良三輪山大神神社の分社、磐座神社

ここでの祭神は、少彦名命であるが、わずかに磐座いわくらといわれる神石のみをとどめる小社である。

3) 群馬県の薬種業者で大津屋系の流れをくむ滝川家

江戸末期の上野内の有力な薬種商は、店舗屋号として、大津屋系と境屋系の二系統のいずれかに属した。そのうちの大津屋系の流れをくむ高崎市赤坂町の滝川家⁹⁾は、明治末期まで毎年12月冬至の日に神農祭を行っていた。この日は米飯を炊かず、その夜は家族一同が集まって汁粉で神農祭を祝う習慣があった。神農祭は、かつては滝川家ばかりでなく、広く薬種商では一般的に行われた風習であった。

IX ま と め

今日に伝わる医薬の祖、神農と神農の祭りについて、それがどのように庶民の精神生活に住みついていったか、その祭礼民俗の中に考えてみようと、東京湯島聖堂の「神農祭」と大阪少彦名神社の「神農さんのお祭り」の比較検討を試み、以下のような注目すべき結果を得た。

1) 両所の祭りの同一点

- ①祭神は神農である。
- ②祭りの期日は11月23日である。

2) 両所の祭りの相違点

- 湯島聖堂の「神農祭」では：
 - ①「神農祭」とは呼ばれているものの、本来神社ではない史跡湯島聖堂(財団法人斯文会の

管理)が主催して、隣接する神田神社の神官による神式の、儀式中心の式典様式である。

- ②漢方医学の復興を願う、漢方の医学者が中心の『官』の立場からの『医学祭』的祭りである。

●少彦名神社の「神農さんのお祭り」では：

- ①薬種業者が同業者の組合互助組織である「神農講」をつくり、この講中での祭りに端を発し、これに後々町衆が参加して発展してきた神社主催の町のお祭りである。
- ②神社門前に露店商が出る、民衆活力を結集した『庶民』が中心の『商業祭』的お祭りである。
- ③香具師かぐしと呼ばれる露店商も祭りに包含されるに至るが、彼らの社会は閉鎖的で、仲間意識の結集を促す精神的よりどころとして、神農の名が利用されている。
- ④「医薬祖」としての神農の性格に、「市の祖」、「商業交易の祖」という性格をも合わせもつようになった。

このように、神農祭は祭りの発展途上で、主体となる人々の思想を反映することが多く、なおかつ地域の社会性また人間性の違いにもより、内容が変化し、東京と大阪での相違につながったものと思われる。

参考文献

- 1) 著者未詳：浪華百事談巻3(新燕石十種第1の内)
- 2) 辻善之助：岩波講座。日本歴史(廃仏毀釈)，岩波書店，1963年
- 3) 佐和隆研ほか：京都大事典。387頁，淡交社，1984年
- 4) 武田薬品：百八十年史。1958年
- 5) 添田知道：香具師の生活。雄山閣，1954年
- 6) 小川鼎三：医学の歴史。160～161頁，中央公論社中公新書，1964年
- 7) 富士川 游・小川鼎三：日本医学史綱要第2巻。157～158頁，平凡社東洋文庫，1974年
- 8) 佐和隆研ほか：京都大事典。923頁，淡交社，1984年
- 9) 丸山清康：群馬の医史。105～107頁，群馬県医師会，1958年

著者への連絡先：〒371 前橋市下小出町2-23-7
湯浅 高之 0272-32-4184